

第56回全日本実業団剣道大会

平成25年9月23日(祝) 日本武道館
主催◆全日本実業団剣道連盟
撮影◆窪田正仁

最優秀選手賞◆
下村和弘
NTT・28歳・五段

雌伏の時を経て NTTが頂点へ

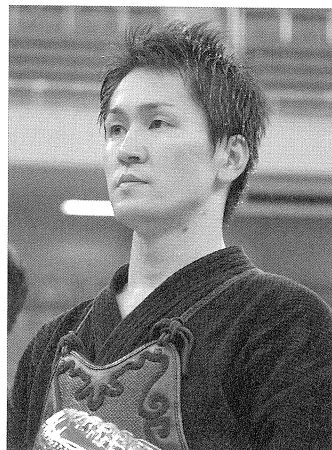
毎回多数のチームが参戦するこの大会ならではの特徵として、1回戦から準々決勝までは1試合の時間が3分間と短いことが挙げられるだろう(準決勝からは4分間となる)。試合時間が短いだけに参加選手も自然とアグレッシブな戦いを見せ、日本武道館に設けられた16コートの各試合場では熱戦が繰り広げられた。

実業団日本一の座を目指し、実に336もの企業がエントリーした今大会。その頂点に立ったのはNTT。関東大会、そしてこの全日本大会とつねに上位を賑わす強豪チームという印象が強いが、大会の優勝となると第49回大会平成18年、NTT東日本・本社が優勝)以来のこととなる。7年もの雌伏の時を経て、やっとつかんだ4度目の日本一。決勝戦を終えるやいなや、選手、関係者らの目には涙がにじみ、この日のために費やした日々の苦しさを感じさせた。

NTTが決勝戦を争ったのは、今回が初の決勝進出となる西日本シティ銀行(本店)であった。福岡を拠点とする同チームには強豪選手が数多く所属。九州大会は

もちろんのこと、この全日本大会でもその存在感をアピールしてはいたが、決勝戦へとコマを進めるまでにはあと一歩のところまで武運に恵まれてこなかった(西日本相互銀行時代に3位が2回、西日本銀行として3位が2回ある)。今回ついに長く立ちがだかっていた準決勝の壁を突破し、悲願の決勝進出を叶えたのであった。

過去の戦績に優るのはNTTのほうだが、やはり西日本シティ銀行の勢いは警戒すべきものがあつたようだ。NTT・高井田誠監督は優勝決定後の談話で「(西日本シティ銀行は)素晴らしいチームだと思います。それだけに決勝戦前には選手たちに『こちらが胸を借りるつもりで戦ってこい』と話して送り出しました」とあくまで挑戦者の気持ちで決戦に臨んだことを明かしている。



決勝

【大将】下村(NTT) ◎コー 小野(西日本シティ銀行・本店)

▲副将戦の勝利で逆転したのは西日本シティ銀行。メンバーの奮闘を受けた小野は開始から勢よく攻める。一方の下村は落ち着いて試合ぶりを見せ、小野が出てくるところにコテを先取。その後は激しい攻防となるも、最後は下村のコテが再び決まった(写真)

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
NTT		齊藤	岡	阿南	竹越	下村	2
		◎メ		×	◎	◎コ	
西日本シティ銀行(本店)		甲斐	内野	渡辺	濱地	小野	3
							2



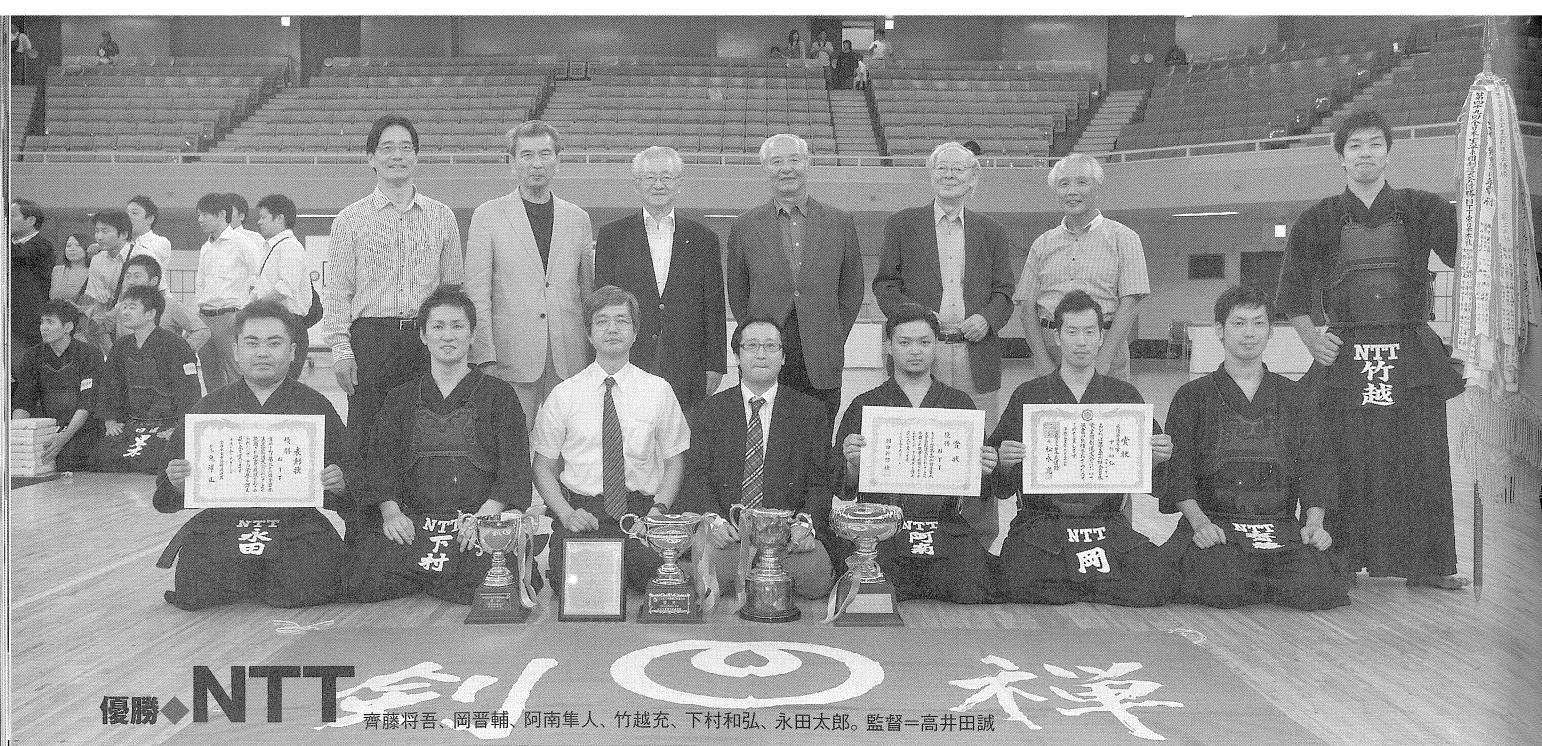
NTT・竹越がメンで先制。追い込まれた濱地だったがひきどりで一本奪うと、竹越のメンの起こりをドウに切って逆転勝利(写真)。窮地から一転、チームにリードをもたらした



NTTの齊藤は中央大学出身、西日本シティ銀行の甲斐は早稲田大学出身。両チームともに先鋒を務めるのは23歳の新戦力だった。新鋭同士の戦いは齊藤が技ありのコテとひきメン(写真)で二本勝ちを挙げた

NTTにとっては7年ぶりの、西日本シティ銀行にとつては初となる日本一がかった戦いは、先鋒戦でNTTの齊藤が新人らしいはつらつとした試合ぶりを見せれば、西日本シティ銀行は次鋒戦、副将戦と執念の見える戦いで結果的に勝負を逆転させた。そして雌雄を決した大将戦の緊張感……。優勝、2位とそれぞれ順位は着いたものの、試合結果よりも試合内容が強く印象に残る、まさに決勝戦にふさわしい激闘であった。

優勝を決めたNTT陣営、誰からともなく円陣を組み、互いに健闘をたたえ合う。高井田監督の目にもまた涙。嗚咽を堪えながら監督が語ったのは、優勝に手が届かなかった期間の辛さ、悔しさ。



優勝◆NTT 齊藤将吾、岡晋輔、阿南隼人、竹越充、下村和弘、永田太郎。監督=高井田誠

準々決勝【次鋒】中石(日本通運・本社)②メー 奥島(伊田テクノス・本社)

▶先鋒・松田の勝利を受けた中石がわずかに1分30秒ほどでメンを二本連取し(写真は二本目)、王手をかける。伊田テクノスの大将・橋本は実業団剣道界きっての猛者だけに日本通運も手堅く戦い、その後の中堅、副将戦を引き分けに押さえて勝利

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
日本通運(本社)	①	松田	中石	中野	柴田	黒木	2
	②	②メ	②メ	②メ	②メ	②メ	3
伊田テクノス(本社)	③	奥島	榮花	石山	橋本		1
	④	④メ	④メ	④メ	④メ	④メ	1



準々決勝【副将】竹越(NTT)③メー 菊池(ベアハグ・本店)

▲初の入賞を狙うベアハグが奮闘。先鋒戦、中堅戦を奪ってNTTを追い込んだ。勝負どころとなった副将戦、あとのない竹越だったが、ここでは一本目にコテを決めるや(写真)、その後メンも追加。大将戦はNTT・下村が31秒の圧巻の勝利

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
NTT	①	齊藤	岡	阿南	竹越	下村	2
	②	②メ	②メ	②メ	②メ	②メ	4
ベアハグ(本店)	③	外園	丸山	菊池	上野山		3
	④	④メ	④メ	④メ	④メ	④メ	2



は橋本がひきメン写真左、片手ツキで勝利を挙げた

6回戦 伊田テクノス(本社)24(XO) 三井住友海上(神田) 大将 橋本(ツ) 宮本

▲三井住友海上は中堅から小田口、立見、宮本と実業団剣道界で黄金時代を築いたベテランを揃えた。前3人が引き分けたあとの副将戦で伊田テクノスが二本勝ち。大将・宮本が攻めるがここは橋本がひきメン写真左、片手ツキで勝利を挙げた



準々決勝【次鋒】内野(西日本シティ銀行本店)③メー 藤根(日新電機)

▲先鋒の二本勝ちを受け、気よくした内野は上段・藤根の片手メンを誘って返しメンを二本連取(写真は二本目)。この日健闘を見せた日新電機だが、ベスト4進出を賭けたこの戦いでは西日本シティ銀行の前に押し切られた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
西日本シティ銀行(本店)	①	甲斐	内野	渡辺	濱地	小野	4
	②	②メ	②メ	②メ	②メ	②メ	7
日新電機	③	西澤	藤根	北村	國田	奥風	2
	④	④メ	④メ	④メ	④メ	④メ	1



準決勝【次鋒】岡(NTT)③メー 中石(日本通運・本社)

▲先鋒はNTTの齊藤がわずか26秒の速攻の勝利。これに続けと奮闘したのは岡。思い切った跳び込みメンを決めて一本勝ち(写真は岡の攻め)。その後の中堅、副将を引き分けに終えたNTTが決勝戦へとコマを進めた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
NTT	①	齊藤	岡	阿南	竹越	下村	3
	②	②メ	②メ	②メ	②メ	②メ	6
日本通運(本社)	③	松田	中石	中野	柴田	黒木	2
	④	④メ	④メ	④メ	④メ	④メ	0



準決勝【大将】小野(西日本シティ銀行・本店)③メー 高村(三井住友海上・本店)

▲次鋒戦の失点により追う立場となった高村。この日はチームの救世主的活躍を見せていた高村だったが、さすがに力尽きたか。コテを浅く仕掛けたところを読まれ、小野にメンを打ち込まれる(写真)。挽回するには残り時間が少なすぎた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
西日本シティ銀行(本店)	①	甲斐	内野	渡辺	濱地	小野	2
	②	②メ	②メ	②メ	②メ	②メ	3
三井住友海上(本店)	③	山田	石井	鈴木	井口	高村	1
	④	④メ	④メ	④メ	④メ	④メ	0

準々決勝【代表】鈴木(三井住友海上・本店)コー 俣野(東レ・研究所)

▲東レのリードで迎えた大将戦は三井住友海上・高村が初太刀のメンを決めて一本勝ち。代表戦へと望みをつないだ。代表に立つのはともにこの対戦で二本勝ちを挙げた選手同士。緊迫感あふれる戦いは試合時間1分ほどが過ぎたところで鈴木のコテで決勝(写真左が鈴木)

チーム	順	先	次	中	副	大	得点	代
三井住友海上(本店)	①	山田	石井	鈴木	井口	高村	2	鈴木
	②	②メ	②メ	②メ	②メ	②メ	3	コ
東レ(研究所)	③	堀	八木	寺井	俣野	庄田	3	俣野
	④	④メ	④メ	④メ	④メ	④メ	2	

その言葉にあるとおり、今大会では怒濤の攻撃力を見せつけ、大差で相手を突き放す試合が幾度も見られた。

決勝戦もさることながら、準決勝の三井住友海上(本店)との試合もまた見応えのある内容だった。

今年は関東大会で2位に入賞している三井住友海上は、中堅の鈴木と大将の高村が軸となり、6回戦では昨年の優勝チームであるパナソニック(E S本社)を撃破している。この日とくに光っていたのは大将・高村の勝負強さ。6回戦は大将戦の末の勝利。準々決勝ではリードを許した展開を自らの勝利で代表戦に持ち込むなど、「ここぞ」という場面で、求められる条件どおりの勝利を挙げてきていた。

西日本シティ銀行にとっては長年破ることができなかった準決勝の壁が、ここでもまた厚く立ちちはだかるかに思われたが、次鋒・内野の活躍で先手を取ることに成功。大将の小野も高村の猛攻に耐え、焦りを誘った末に会心の一打を打ち込んでいる。

惜敗を喫し、3位に終わった三井住友海上だが、実はこの大会での入賞は第51回大会(平成20年・当時優勝)以来、5年ぶりのこと。関東大会に引き続き、今大会もまた若手メンバーを配した新しい布陣で臨んでいるだけに、これはいづれ来たる新たな飛躍の兆候と見てよいだろう。

3位のもう1チームは日本通運(本社)。誰かがポイントをとればすぐさま挽回するなど、チーム一丸となった戦いぶり。第29回大会(昭和61年・当時東京航空

「それはもう……試合に出ている選手たちが一番身につまされていたと思います。それでも何とかあきらめずに……あきらめそうになりながらも、それでもやり続けてくれたことが今日の結果につながったのだと思います。毎大会、今回は今回、という思いで7年が経ちました。選手はそのプレッシャーに負けずに、本当によくやってくれました」

今大会に臨むにあたっては、主将の下村を中心として、剣道の基本に立ち返った稽古を積んできた監督は明かす。

「やるだけのことは全部やろうと皆で一丸となって取り組んだ成果です。大将で主将の下村が率先して稽古をして、チームをまとめて引張ってくれました」

決勝戦、自らの手で優勝を決めた下村は大会の最優秀選手に輝いている。

一方、2位という結果に終わった西日本シティ銀行・古賀裕章監督は「初の決勝進出ですからうれしい結果ではありますが、やはり残念と言えは残念。もう一歩及ばずでした。課題も見えたので、また来年の優勝を目指してがんばります」とやや悔しさを滲ませた。

伝統ある西日本シティ銀行だが、日頃は福岡市中央区大濠にある体育館内道場を利用して、週に2回の稽古に取り組んでいるという。日々目指す剣道、そして自軍の特色として語るのが、攻めの剣道。

「攻撃的なチームといえますか、引き分けを狙うのではなく二本を取りに行くようなチームですね」



2位◆西日本シティ銀行(本店)

甲斐勇太、内野辰彦、渡辺雄太、濱地佳祐、小野公次、能塚靖裕。監督=古賀裕章



3位◆日本通運(本社)

松田悠、中石吉郎、紺野剛、柴田優貴、梯達斎、黒木哲也。監督=野村隆行



3位◆三井住友海上(本店)

山田健太郎、石井将勝、鈴木悠平、井口亮、高村泰央。監督=下畑精一郎

